

# 幼児と童話

渡辺桂子

幼児の言語活動のひとつとして、私は幼児に童話をつくるということをさせています。幼児はこれをお話づくりといて興味を持っています。

このお話づくりという遊びは、なにかの折に三、四人の子どもたちと、寄せ木細工のような童話をつくったことがきっかけではじまったことですが、その後も折にふれこの遊びはおこなわれているのです。

しかしむろん、このお話づくりなどという遊びは、こちらの指導を多く必要とする遊びですから、こちらにその意識がじゅうぶんないと効果をあげることができません。

お話づくりをしようとしても、子どもたちにただしゃべらせておけば、子どもたちはただことばの羅列をするだけです。

例えば、このあとに記した童話「タロウと水鉄砲」を例にとってみてもそうです。

「タロウハ、水鉄砲ヲモライマシタノデ、ヨロコソデ、庭デ水鉄砲ヲヤリマシタ。」  
「ムコウカラ、チャコチャンガキタノデ、カケチャイマシタ。」

「犬小屋ニモカケチャイマシタ。」

「チョウチヨニモカケチャイマシタ。」

「ハッパニモ、オ花ニモ、カケチャイマシタ。」

などなど、いろいろの子どもたちが、てんでにいいます。子どもたちは、この「……ニカケチャイマシタ。」を、いろいろいいあうこと自体がたのしいのです。しかしその羅列では話にはなりません。

そこで、

「モモちゃんにかけちゃったの？ モモちゃんは、なんていったでしょうね」と私。  
子どもたちはいいます。

「ドウカ、ワタシニカケナイデ。」

「それじゃ、犬は？」

「ドウカ、犬小屋ニカケナイデ。」

「それじゃ、ちょうちょは？」

「ドウカ、ワタシニカケナイデ。」

「それじゃ、お花たちは？」

「アア、冷メタクテイイ気持。」

「それじゃあ、お花たちにだけ、いっぱいかけてやりましょう。」

こういうやりとりの結果、最後に私がまとめたものが童話「タロウと水鉄砲」なのです。こうして四、五人のグループが話しあってまとめた童話を、こんどは、

「……ちゃんたちが、さっきこんなお話つくったのよ。」



と、いつ、クラス中の者に話してやります。すると他の子どもたちも、自分たちも話をつくらうというわけで、また別の折にいろいろと「お話づくり」をするわけです。

こうしてクラスの子どもたちは、いつのまにか自分たちのつくった童話のふえていくことをたのしむようになりましたが、このお話づくりで大切なことは、ともかく話をまとめるようにしむけることです。いろいろとことばをいいあうということだけでも、いいのですが、やはりいいたいほうだけを口にしただけではつまりません。絵画や製作と同じように創造のよろこびを、お話づくりのようなことば遊びに期待することは決して高度なことだとは思いません。

なおこの一年ばかり、子どもといっしょにお話づくりに精を出した結果、自分自身としても非常に得るところがありましたし、幼児の童話についても深く考えさせられました。

それはお話のうえでも、子どもたちは決して教訓的なものに興味を示さないということです。私などもそうですが、とかく童話と教育ということを強く考えがちなのですが、やはり幼児童話はたのしいものでなければならぬという考えを強くしました。

しかしそれといっしょに、人生観を育てるなにかが必要だということも考えるのです。殊に幼児童話なんぞはと、軽くあつかわれがちですが、私はけっしてそうは思わないのです。

ただおとなのものどちがって、幼児の頭で理解できる範囲のことからには自ら制限があるので扱う素材というものも限られています。やはり作品の内容を意味づけるものは、はっきり持っていなければなりません。いい童話は、他のいい文学作品と同じだけの重さがあると思っています。幼児童話といえば、実に意味のない、たわいのないものが多過ぎます。といって露骨な教訓になっては困るのですが……このあたりに幼児童話のむつかしさがあると思いますが、どうでしょう。

その意味から、二つ目の作品「にげてしまったちようちょさん」をとりあげました。文章は私流ですが、内容については子どもたちのつくったままで少しも手を入れてはありません。

やはり、水鉄砲のときのようにな、ことばのくりかえしというか積み重ねをたのしんでいたようでしたが、どうとう門の外へちようちょがいつてしまったとき、そして、

「けれども、もう子どもたちは、おいかけていきませんでした。」

という子どもたちのことばを聞いたとき、私はツーンとする程、子どもたちをいとしいものに思いました。そしてまだなにかいい続けたそうな子どもたちの声を、このことばを最後にわざと切らせてしまいました。もうなにもいわせたくありませんでした。そして、私はそのときの子どもたちの顔を、いまでも忘れることができないのです。

ちようちょをおつて、どこまでもどこまでも走つていきたい、門の外までも、どこまでも……でも、もう子どもたちは、おいかけていきませんでした。

そういつてしまつてからの、子どもたちの残念そうな顔……ほんとにちようちょに逃げられてしまった顔でした。けれどそれでいいと私は思つたのでした。

生きるということは、いろいろのことをたえることだからです。そしてそれを、子どもたち自身がうたいあげたことを、私はこの上なく嬉しいものに思うのです。

× ×

×

×

## 幼児童話

### 「タロウと水鉄砲」

タロウの家へお客さまがきました。

お客さまはタロウに、水鉄砲のおみやげをくれました。

タロウはよろこんで、さっそく水鉄砲であそぶことにしました。

せんめんきに水をいれて、庭へでました。

庭にでると、お日さまがカンカンでりで暑い、暑い。

けれども、水鉄砲のうれしいタロウは平気です。

せんめんきの中に水鉄砲をいれて、シュッ、シュッ、シュッ。

「やあ、すごいなあ。」

タロウは、すっかりうれしくなりました。そうして、水鉄砲を上にもつけてはシュュー。下にもつけてはシュュー。あつちをむけてはシュュー。こつちをむけてはシュュー。水はいきおいよく庭じゅうにとびました。どうとう、せんめんきの水がからっぽになりました。

タロウは、またせんめんきに水をくんできました。

「さあ、こんどは、どこへとばそうかな……。」

と考えていると、となりのモモちゃんがやってきていいました。

「タロウちゃんていじわるね。垣根のむこうを歩いているのに、きゆうに水をかけるなんて。おかげでスカートがぬれちゃった。」

モモちゃんは、ブンブンおこっていきました。そこでタロウが、

「それじゃ、もう、垣根のほうにはかけないことにしよう。」

と考えていると、こんどは、犬のチローがやって

きました。

「タロウちゃんていじわるだ。犬小屋の中でねているのに、きゆうに水をかけるなんて。おかげでねどこがぬれちゃった。」

チローは、ブンブンおこっていききました。

そこでまた、

「それじゃ、もう、犬小屋のほうへはかけないことにしよう。」

と考えていると、こんどは、紋白ちよりのフルフルがやってきました。

「タロウちゃんていじわるね。お庭の上をとんでいるのに、きゆうに水をかけるなんて。おかげで羽がぬれちゃった。」

フルフルも、ブンブンおこっていききました。

「それじゃ、もう、ちようちよのほうへもかけないことにしよう。」

と考えていると、タロウのすぐそばで、まつばほ

たんと、百日草がいました。

「でも、タロウちゃんはごしんせつよ。暑くて、暑

くてたおれそうだったのに、冷めたい水をかけてくれるなんて。おかげで、わたしたち元気がでたわ。」

タロウは、きゆうにうれしくなりました。

そこでこんどは、ごしんせつねといったまつばほたんや、百日草のほうにだけ、水をどぼしてやりました。

×

×

「にげてしまった

ちようちよさん」

幼稚園の部屋に、子どもが大ぜいあそんでいました。

するとそこへ、いっぴきの白いちようちよがはいってきました。

子どもたちは、すぐに白いちようちよをみつけていいました。

「ちようちよだ！」

「つかまえよう、つかまえよう！」

絵本をみていた子ども、絵をかいていた子ども、積木あそびをしていた子ども、みんな立ちあがって、白いちようちよをおいかけました。

ちようちよはびっくりして、部屋の外へとびだしました。

子どもたちも、部屋の外へとびだしました。

そこでちようちよは、ブランコのほうへにげました。

子どもたちも、ブランコのほうへおいかけていきました。

そこでちようちよは、すべり台のほうへにげました。

子どもたちも、すべり台のほうへおいかけていき

ました。

そこでちようちよは、ジャングルジムのほうへにげました。

子どもたちも、ジャングルジムのほうへおいかけていきました。

そこでちようちよは、たいこ橋のほうへにげました。

子どもたちも、たいこ橋のほうへおいかけていきました。

それでおしまいに、ちようちよは、もういくところがなくなつて、幼稚園の門のほうへにげました。

子どもたちも、門のほうへおいかけていきました。

そこでちようちよは、門の外へにげました。けれども、もう子どもたちは、おいかけていきました。

×

×

(淡路町幼稚園)